

新緑の美しい五月、京都では三大祭に数えられる「葵祭」が行われる。これは上賀茂神社・下鴨神社（併せて賀茂大社）の祭である。その関連行事として、

一日、上社で競馬の足汰式

三日、下社で流鏑馬の神事

四日、上社で齋王代の御禊（来年は下社）

五日、上社で競馬、下社で步射神事

はずで済んでいる。ついで十二日、昼間に下社ゆかりの御蔭祭が、また夜中に上社ゆかりの御阿礼祭が行われ（共に神の誕生儀式）、その上で十五日の神事と祭礼を迎える。

この祭は、欽明天皇朝（六世紀中ごろ）にカモ地域でカモ族の人々が五穀の豊饒を祈って始めたと伝えられる。上社の祭神は別雷神、下社の祭神はその御親神と称されるが、これも当地に雨水を恵む雷（神鳴）の威力を畏れ慎み、その神々（カモカミ）を崇び敬うカモ一族の素朴な信仰の拠り所を端的に表している（55話参照）。

その上、約千二百年前（七九四年）の平安遷都により、当社は王城鎮護の大神と仰がれるようになった。とりわけ嵯峨天皇が「賀茂祭」を勅祭と定めて勅使を両社へ遣わされるのみならず、紫野に齋院御所を設けて、有智子内親王を齋王として住ませ、勅祭当日、両社へ参らしめられることになった。それ以来、この祭は、勅使と齋王が下社と上社へ向かう数百名の優雅な行列を中心に営まれ、大勢の見物人を楽しませるようになったのである。

その光景は昔も今も大筋で変わらない。ただ、勅使代・齋王代など五百数十名の男女と牛馬四十頭、及び多彩な衣装や用具などを毎年確保し、滞りなく実行するためには、大変な労力と費用を要する。そこで数年前に民間有志が「葵祭行列保存会」を作り、京都府・市・観光協会などの援助を得て、人馬の準備、当日の運営、調度の補修などに尽力している。

昨年、この会より理事を委嘱された。そこで勤務先のゼミ生と一般受講生の中から、齋王代列の女官二人と勅使代列の白丁（白張を着て雑役に従う男子）三十人を募り、顧問をしている弓道部の幹部に纏め役を頼み、事前に趣旨説明をした上で、当日、京都御所から下鴨社を経て上賀茂社まで全行程を一緒に歩いた。正直なところ、結構シンドイが、どの学生も初めての体験に感動したという。今年も明日、新メンバーが奉仕する（28話参照）。

ちなみに、この祭は、全ての社殿や参列者らを葵と桂で飾るところから、一般に「葵祭」と称する。その葵は歴史的仮名遣いで「あふひ」と記し、古来、あふを会ふ、ひを日・人に懸けて和歌に詠むことが多い。「あふひ」祭の日には、多くの人々と出会い、カモの神々とも心を通わすことができるにちがいない。

※ 上賀茂神社に近い私ども京都産業大学の日本文化研究所の所報も「あふひ・AOI」を誌名としている。